

# 琉球大学学術リポジトリ

## 沖縄県多良間島における伝統的社会システムの実態と変容に関する総合的研究

メタデータ	<p>言語: Japanese</p> <p>出版者: 高良倉吉</p> <p>公開日: 2009-03-03</p> <p>キーワード (Ja): 沖縄県多良間島, 伝統的社会システム, 八月踊り, 琉球, 水納島, スツウプナカ（豊年祭）</p> <p>キーワード (En): Tarama Island, Okinawa Prefecture, Traditional society, Dance of August (8-gatsu odori), The Ryukyus, Minna island, Sutsuupunaka(celebration of a full harvest)</p> <p>作成者: 高良, 倉吉, 池宮, 正治, 山里, 純一, 玉城, 政美, 川平, 成雄, 赤嶺, 政信, 狩俣, 繁久, 大胡, 太郎, Takara, Kurayoshi, Ikemiya, Masaharu, Yamazato, Junichi, Tamaki, Masami, Kabira, Nario, Akamine, Masanobu, Karimata, Shigehisa, Ogo, Taro</p> <p>メールアドレス:</p> <p>所属:</p>
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/9027">http://hdl.handle.net/20.500.12000/9027</a>

# 土原豊見親考

藤江淑恵\*

## はじめに

15世紀末に初めて多良間島統一という事業を成し遂げた土原豊見親春源は、現行の多良間島の習俗や伝承においても今なお大きな影響力を持つ存在である。成化年間（1465～1488）に宮古の仲宗根豊見親に従軍し、八重山遠征に参加したことから、王府の公的史料にも土原豊見親に関する記事が収録されているほか、康熙44年（1705）に始まる宮古の史書編纂事業の中の複数の史書にも、その人物伝を中心とした伝承が記載されている。具体的には、『琉球国由来記』『琉球国旧記』『球陽』『遺老説伝』（以上、公的史料）、『雍正旧記』『宮古島記事』（以上、宮古史料）等の史書であり、また多良間島現地には土原豊見親ゆかりの拝所由来や伝承が口碑の形で多く残されている。

土原豊見親に関する伝承で最も多いものが、彼の前身であるヲソロ（土原豊見親の幼名）時代の逸話であり、多良間統一以前の土原豊見親の非凡さや神の加護を示したものが多い。その中で代表的なものが、土原豊見親の曾祖父の伊知ノアジの大浪遭遇譚に始まり、その4代の系譜を述べた『琉球国由来記』中の記述であるが、土原豊見親伝承そのものには異伝やエピソードの混同が多く、現行習俗においては様々な土原豊見親像が存在する（成人後の土原豊見親の足跡に関する伝承等は、多良間島の口碑に伝わる）。本論文では、このヲソロ時代の逸話を中心とする史料上の土原豊見親伝承を、各史料の性格や方針等を考慮した上で整理統合し、土原豊見親像の再構築を試みるものである。

## 第1章 王府史料に見る多良間

近世の王府史料の中で、多良間島に関する記事を収録したものとして、『琉球国由来記』（1713年）、『琉球国旧記』（1731年）、『球陽』（1745年）、『遺老説伝』（1745年）の4書が挙げられる（以下、『琉球国由来記』は『由来記』、『琉球国旧記』は『旧記』と略）。

『由来記』『旧記』『遺老説伝』の三書は、いずれも多良間の聖地や御嶽、その土地の人物伝を記述の中心にしていることから内容の重複が多い。また15世紀末に初めて多良間島を統一した土原豊見親に関する記述が多く、その前後の時代に焦点を当てていることでも

\* ふじえ よしえ 琉球大学大学院人文社会科学研究科 1997年度修了生

共通している。

『球陽』もまた、「一 土原豊見親、多良間主となる（1500 年）」を記述の初めに置き、土原豊見親後の多良間島を王府と多良間の関係の起点とみなしている。しかし『球陽』にはそれ以上土原豊見親に言及した記述はなく、津波・飢饉・病災などの自然災害や、漂流者・異国船来航、島人の賞賜・処罰など、同島の事件や出来事の詳細な記録が年号とともに並ぶのみである。

ここでは王府と多良間島の関わりの起点となる人物であり、同島の歴史や祭祀に多大な影響を及ぼした土原豊見親に焦点を当てる『由来記』『旧記』『遺老説伝』の3書の記述に着目し、その考察を通して王府の多良間島観や王府における同島の位置付けなどを探りたい。

## 第1節 王府史料の中の多良間

### (1) 『由来記』

『由来記』では、多良間島に関する記事は、卷二「官職列品」と卷二十「各処祭祀九」の2箇所に見られる【注1】。卷二は官古役人の役職名を列举したものであり、卷二十は、26項から28項が多良間島の、29項が水納島の拝所に関する内容である（『由来記』巻20-587～589頁）。卷二十においては、現行の仲筋・塩川・水納の3村体制ではなく、水納も含めた多良間嶋村1村として総括されている。卷二十の見出しは以下の通りである。

- ①26 項 運城御嶽 6 神
- ②27 項 泊御嶽
- ③28 項 ガワラ瀬御嶽 2 神
- ④29 項 城花持御嶽

①の運城御嶽と②の泊御嶽は、どちらも土原豊見親由来の御嶽であり、両嶽の由来は②の中でまとめて述べられている（①は運城御嶽の神の神名を列举するのみ）。運城と泊は一对の存在として述べられることが多い。③の内容は、以下で述べるように、前半の「伊知ノアジに関するエピソード」と後半の「ヲソロに関するエピソード」に分けられる。

#### 〔前半-伊知ノアジに関するエピソード〕

昔、伊知ノアジ・ホナママという夫婦が嶺間に耕作に出かける。二人はそこで大浪に遭遇し、奇跡的に生き残った。伊知ノアジ・ホナママはその後、土原大殿という男子と二人の娘をなす。二人の娘のうち姉は「多良間島一方の主、ハリマ大殿」に、妹は「水納島主、

ヨノヌシ」に嫁いだ。

〔後半-ヲソロに関するエピソード〕

ヲソロは土原大殿の孫で、幼少時より信心が深く、神が降臨した運城・泊両御嶽を日頃から拝み崇敬する。ある時、ヲソロを妬む塩川村のハリマニキヤモヤがその抹殺を試みるが、両嶽の神の託宣が七歳の童女ヲラチトノマシラベに下り、ヲソロは神の加護を得て、ヨシカ（吉川）の里でハリマニキヤモヤを平定する。

③は、現塩川村のガワラ瀬御嶽の由来に関する内容である。偶然に二つの大石が空を飛来するのを目撃したハリマタマサラが、霊石としてこの石の周囲に植林したところ、2神（チャウントモハイチャウントモケズ・ヲセキレノフセキレノヌシ）が降臨する。神はハリマタマサラに「ハリマ大殿ヨタイ大殿塩川村主」の名を与えた。

④水納島の城花持御嶽の2神の名を記す。由来その他に関する記述は「右嶽、由来不伝。自往古、崇敬仕来也。」として、明らかにされてはいない。『由来記』ではこの項に続き、「旧跡」として水納島の鷹塚の紹介をしている。

(2) 『旧記』

『旧記』には、多良間島に関する記述が巻之九、附卷之三、附卷之十の3箇所にある【注2】。

巻之九（宮古・八重山）は泊嶽・瓦瀬嶽に関する内容、附卷之三（嶽・森・威部）は運城御嶽・城花持御嶽に関する内容で、『由来記』巻二十（各处祭祀編）の、連続した四つの記述（①運城御嶽、②泊御嶽、③ガワラ瀬御嶽、④城花持御嶽）が『旧記』の収録に当たり、上のような形で分散したものである。『旧記』が漢文表記であることを除けば、各項に出てくる逸話等の内容は人名・地名から展開に至るまではほぼ同一のものである。

附卷之十（郡邑長）は、『由来記』巻二（官職列品）の内容に相当する（『旧記』附卷之10-276頁）。『由来記』と大きく異なるのは、『由来記』で「多良間嶋村」と一括されていた多良間の村名が、『旧記』附卷之十（郡邑）では「中筋・塩川・水納」という現行の3村体制になっていることである（『旧記』附卷之10-266頁）。『由来記』で旧跡として紹介された水納島の鷹塚に関する記述はここにはない。

(3) 『遺老説伝』

『球陽』外巻の『遺老説伝』には、外巻一、外巻二、外巻附に、多良間に関する記述がある【注3】。

外巻二の 77 項は、『由来記』『旧記』の「泊御嶽」の記述に相当する。前半が〔伊知乃蘆に関するエピソード〕、後半が〔遠曾呂に関するエピソード〕で、伊知乃蘆・姥保那末屋夫婦が大浪に遭遇する話や遠曾呂が塩川村の張間仁喜也毛屋を平定する話など、記述を構成するエピソードも先の 2 書のものとはほぼ共通するものである。唯一異なるのが、伊知乃蘆・姥保那末屋の子供に関する記述である。『由来記』では伊知ノアジ・ホナママの子は男児の土原大殿（ヲソロの祖父）と娘二人で、姉は「多良間島一方の主、ハリマ大殿」に、妹は「水納島主、ヨノヌシ」に嫁いだ。このことを念頭に置いた上で、以下、『遺老説伝』の相当部分の記述を検討したい。

「夫婦得天祐免比災殃以全性命後生一男二女男名土原大殿二女名不詳（…中略…）長女適于多良間主張真大殿次女適于遠曾呂水納島世農主土原大殿之孫」（『遺老説伝』外巻 2-77 項。55 頁）

一見して『由来記』と大きく異なるのが、伊知乃蘆の次女に関する記述である。『遺老説伝』では次女の嫁ぐ相手は「水納島世農主土原大殿之孫」と但し書きのある「遠曾呂」になっており、字義通り解釈すると、次女は兄弟である土原大殿の孫に嫁いだことになる。

これは必ずしも考えられない事態ではないが、『由来記』のエピソード群が、①伊知ノアジ・ホナママの大浪遭遇、②二人の子供、土原大殿と二人娘、③土原大殿の孫ヲソロの塩川村ハリマニキヤモヤ平定、というように、①→②→③の話の流れが世代の流れに沿った構成になっているのに対し、『遺老説伝』のものは、①伊知乃蘆・妻姥保那末屋の大浪遭遇、②二人の子供、土原大殿と二人娘、③次女と土原大殿の孫「遠曾呂」の婚姻、④「遠曾呂」の塩川村張間仁喜也毛屋平定、というように、③の段階で異なる世代の話が部分的に重複することになる。類似する二つの伝説の中でなぜこのような違いが生じるのであろうか。このことを考える上で興味深いのが、以下に引用する『遺老説伝』外巻一の 41 項の内容である。

「一往古之世宮古山仲筋村主有平屋西者生得一男名曰折曾蘆其為人也生質正直心操誠実自幼稚時仰天向日朝夕拝礼已及成長愈以尊信諸神焚香拝礼不稍間斷遂運城及泊地栽植竹樹以為神嶽而三七日搬在彼二嶽沐浴齋戒自朝至晚恭供祭品焚香拝礼請招天神出現以示靈効即誠心感天靈驗最速有護国庇民之神出現于運城嶽亦管海守船之神出現于泊嶽自比之後邑中之人皆尊信每年薦祭五穀之初焉」（『遺老説伝』外巻之 1-41 頁）

これは、運城・泊両嶽に神が降臨する話である。ここに登場する人物は、仲筋村の平屋西の息子「折曾蘆」である。信心深い折曾蘆は朝夕拝礼し、運城・泊に竹樹を栽植して神嶽としたところ、運城嶽には護国庇民の神、泊嶽には管海守船の神が出現して、両嶽は邑の聖地となったとある。

ところで運城・泊兩御嶽の神の降臨については、先の『遺老説伝』外巻二の77項〔後半-遠曾呂に関するエピソード〕中にも語られている。それによると、

「遠曾呂自幼穉時尊老恤幼晨昏拜天崇神一日出門而遊忽有一神放光大輝自天而降出現于運城及泊嶽遠曾呂見之出望外頓首伏拝」（『遺老説伝』外巻之2-136頁）

とあり、信心深い「遠曾呂」の前に天神が降臨し、運城・泊兩嶽に出現したとある。つまり、『遺老説伝』には、運城・泊嶽の神の降臨に関する由来の記述が二つあり、平屋西の一男「折曾蘆」と、土原大殿の孫「遠曾呂」という二人の「ワソロ」がそれぞれの主人公として語られているのである。つまり、『由来記』が一貫して運城・泊御嶽に関する伝承を、伊知ノアジ系統の人物で統一して進めているのに対し、『遺老説伝』ではこれに加え、「平屋西の一男、折曾蘆」のもう一つの流れが並行して存在していることになる。この違いが、両書の伝承の差異を生む決定的な要因である。

では『遺老説伝』における「折曾蘆」と「遠曾呂」の関係はいかなるものであろうか。仮に両者が同一人物であると解するならば、外巻之一に登場する「折曾蘆」の父「平屋西」とは土原大殿の子であるにほかならない。この場合は、伊知乃蘆に始まる4代（伊知乃蘆-土原大殿-平屋西-折曾蘆=遠曾呂）の系譜が完成することになるが、外巻之一には平屋西父子を巡る背景や、運城・泊の神の加護を得た折曾蘆の活躍譚などはなく、この項は1神域の由来の話として完結し、他の記事と完全に独立した内容となっているため、これはあくまで仮定の話に過ぎない。

『遺老説伝』外巻一の39項は、塩川邑の張間玉茶良が大石が張間の地に飛来するのを見て、竹木を栽植したところ霊神が出現し、護国庇民の神になったという内容である。この神域の名は記されていないが、張間玉茶良という人物名や大石の飛来のエピソードから、『由来記』『旧記』の「ガワラ瀬（瓦瀬）御嶽」に相当することが分かる。『由来記』にあったハリマタマサラと神が相互に改名するエピソードはここではない。

外巻一の40項は、『由来記』『旧記』の両書には相当記事のない嶺間按司に関する話である。

嶺間按司は、多良間島がまだ宮古の轄地ではなかった時代の人物で、宮古山豊見親に帰服し、故郷多良間島に帰島する際、逆風に遭い見知らぬ国に流される。そこで神舞を目撃した嶺間按司は、多良間島に無事帰還した後に感謝の意をこめて島中でその神舞を踊り（神舞遊）、毎年神への祭礼を催したという話である。この神舞の行事は現在伝わっていないが、塩川村の嶺間には嶺間按司を祀る嶺間御嶽がある。土原豊見親以前の多良間島の有力指導者の伝説である。

外附巻の134項は、『由来記』に言及のあった水納島の鷹塚の話がほぼ同じ内容で収録されている。百合若大臣譚の一種である。

## 第2節 各史料の傾向

### (1) 『由来記』と『旧記』の方針

『由来記』の各処祭祀編では、多良間島の拝所として①運城御嶽、②泊御嶽、③ガワラ瀬御嶽、④城花持御嶽の4箇所がとり上げられ、既に述べた通り『由来記』の記述では現行の3村体制はとられておらず、多良間嶋村と1村で括られているが、これらを見ると①②は現在の仲筋村、③は塩川村、④は水納島の水納村の所在であり、結果的には多良間・水納両島を構成する各村の代表的な聖地を記す形になっている。このうち①②は、伊知ノアジ系統に連なるヲソロ（土原豊見親）由来の地、③は平民のハリマタマサラ（後に神託でハリマ大殿塩川村主となる）由来の地、④は由来不伝である。

①②については、伊知ノアジ・ホナママの大浪遭遇譚に始まり、その子土原大殿と、多良間島一方の主ハリマ大殿に嫁いだ姉、水納島ヨノヌシに嫁いだ妹の二人の娘、そして土原大殿の孫ヲソロが運城御嶽・泊御嶽の神の加護を得て塩川村のハリマニキヤモヤを退治する話が述べられており、各エピソードが伊知ノアジに始まる4代の系譜を辿る構成になっている。この家系の始祖、伊知ノアジとホナママ夫婦が大浪に遭遇して生き残る逸話は、両者の信心深さや神の加護による奇跡という側面を強調しており、結果的に曾孫のヲソロの信心と運城・泊御嶽の神の加護を正当化する、その系譜の正統性を意味する逸話であると考えられる。この二人の子供達の世代では、こうした精神的な素養のほかに、伊知ノアジ系統の人物と権力との結び付きの正当性が、二人の娘の婚姻というエピソードを通して語られる。すなわち、長女と多良間島「一方ノ主」との、次女の水納島「世ノヌシ」との婚姻は、伊知ノアジ系統の人間と支配者層の接近を意味し、後に4代目のヲソロが多良間統一を成し遂げる上での布石となったと考えることが出来る。

伊知ノアジ系統の3代目、すなわちヲソロの父に関する記述は『由来記』にはなく、最後に4代目ヲソロによる塩川村の逆賊ハリマニキヤモヤ征伐の逸話が記されている。ここでは彼の生涯を通じて最も重要な出来事である多良間島統一に関する話はない。にも関わらず、この逸話（ハリマニキヤモヤ征伐）が全記述を通して最も重要な箇所にあたることは明らかである。これはヲソロが運城・泊御嶽の神の加護を得て初めて果たした多良間史上の業績であり、その加護の由来を明らかにするために、伊知ノアジ系統の人物の系譜を語る前段階があったといえる。

このように『由来記』『旧記』では、両御嶽は伊知ノアジ系統の御嶽、ヲソロの御嶽であり、島を代表する聖地として位置付けられている。これが、平民のハリマタマサラ由来のガワラ瀬御嶽の記述とは大きく異なる点である。水納島の城花持御嶽については由来すら明らかにはなっておらず、同様に聖地として列挙されてはいても、それぞれの御嶽の『由来記』『旧記』中での位置付けの違いは明瞭である。

## (2) 『由来記』の方針と『遺老説伝』

『遺老説伝』が『由来記』『旧記』と最も大きく違う点は、(1)で挙げたような史料編集の上での明確な方針を欠いていることにある。『由来記』『旧記』の明確な方針とは、ヲソロの神話化であり、そのために彼の出自の背景となる伊知ノアジの系譜と神の加護・権力等との結び付きを正当化するエピソードそのものを御嶽由来の中で語る形式になっている。これが『由来記』『旧記』の主眼である。『遺老説伝』にはこの2書と重複する記述がいくつもあり、一見、同一のエピソード群で構成されているようにも見えるが、『由来記』『旧記』のような明確な方針を持たないがゆえに、細部の矛盾を取り込んだままの伝承の姿がそこにある。

『遺老説伝』の矛盾とは、既に述べた通り「遠曾呂」と「折曾蘆」という二人のヲソロの存在である。前者は『由来記』『旧記』と同様に伊知乃蘆系統の4代目の人物として語られ、その祖父は土原大殿、父は不明である。そして後者は、平屋西という名の父（これは『由来記』『旧記』には登場しない人物である）と本人の結び付きが語られるのみで、その祖父の系譜等は不明である。そして二人のヲソロにはそれぞれ、運城・泊御嶽の神の出現やその加護に関する由来の話がある。二人のヲソロを結ぶのは、運城・泊の両嶽の存在のみである。

また『遺老説伝』では、これ以外にも伊知乃蘆系統の人物で、記述の内容に混乱を生じている箇所がある。それが前節で言及した伊知乃蘆の次女の婚姻相手である。そこではなぜか次女の婚姻の相手が水納島世ノ主であると同時に、彼女の兄弟の孫の「遠曾呂」になっており、その後に「遠曾呂」の幼少期からのエピソードが語られるという特殊な形式になっている。『遺老説伝』の記述には、ヲソロ伝説も運城・泊御嶽の神の出現に関する話も2通り存在し、伊知乃蘆系統の人物に世代の混乱が生じるなど『由来記』『旧記』に比べて記述の不整合性が目立つ。そしてここでは、運城・泊御嶽の由来が、塩川村のガワラ瀬御嶽や土原豊見親時代以前の人物である嶺間按司の伝承などと同じ比重で語られており、そのためヲソロ伝説もまた整合性を優先することなく、曖昧な記述を曖昧な形のまま残す余地を与えられたといえる。

『由来記』『旧記』の中で運城・泊御嶽の由来は記述の中心であり、ヲソロ伝説に関しても複数の由来や逸話が存在する箇所はすべて伊知ノアジ系統の話に整理統合し、矛盾や重複のない洗練されたヲソロ伝説を創作したと思われる。このことは、当時の王府が多良間史上の人物や出来事のいかなる部分に最も着目し、多良間観を形成したかを示す端的な例であるといえる。

この章では、公的史料に登場する多良間・水納両島の4聖地を紹介したのみだが、これらは多良間島に存在する膨大な数の拝所のごくわずかな例に過ぎない。王府から見た離島の3村を代表するこれらの聖地とは別に、多良間には御嶽をはじめ里神や自然神など様々な神を祀る場所があり、自然な形で地域の信仰が生きている場所である。次の章では、王



府の多良間観に見る聖地とは逆に、地域の側から捉えた拝所・信仰という問題を扱い、その中で土原豊見親やその家系がどのような位置付けにあるかを考察したい。

## 第2章 多良間島の拝所

多良間島には御嶽・里神・井戸の神・海山の神など様々な信仰の対象が存在し、拝所の氏子を構成する単位や祭祀行事の内容も様々ではない。特に御嶽には、女性神役のツカサと男性神役の二才頭が居り、両者は御嶽に関する祭祀をはじめ島の代表的な祭祀・行事の日取りを決定したり、御嶽を祭場としない祭祀においても司祭者の役割を担うなど、多良間の祭祀状況においては最も重要な役割を果たしている【注4】。

各拝所に帰属する氏子の構成は様々である。後述する土原豊見親由来の拝所には、御嶽、多良間神社、里神の3種類があるが、その内、御嶽の氏子は仲筋字内の特定区画に居住する者であり、神社の場合は主に土原豊見親の子孫である。また土原豊見親由来の拝所の一つであるヒトマタウガンは、平時は塩川御嶽の氏子達が氏子を兼ねるところであるが、旧暦8月の八月踊りの時には、字を代表する祭場に変質する。このように多良間では、氏子を構成する単位や祭祀の規模や実施主体等が様々な段階に分かれ、時には重複・混在する。このような複雑な祭祀状況において、これに等しく関与し、統轄するのが上述のツカサと二才頭である。

### 第1節 多良間の御嶽

#### (1) 御嶽

多良間島には以下6箇所の御嶽と神社がある。仲筋字の①運城御嶽、②泊御嶽、③多良間神社、塩川字の④塩川御嶽、⑤普天間御嶽、⑥嶺間御嶽である。

①運城御嶽と②泊御嶽は、前章で述べた通り、土原豊見親の前身ヲソロとその曾祖父伊知ノアジに連なる系譜の者の伝承を背景とした土原豊見親由来の代表的な拝所である。乾隆18年(1753)に白川氏友利首里大屋子が塩川字の塩川御嶽(ガワラ瀬御嶽)と同時に社殿を建造した(『多良間村史』6-217・218頁)。

運城御嶽は「ウイヌウタキ=上の御嶽」、泊御嶽は「スムヌウタキ=下の御嶽」と呼ばれ、互いに対になる存在である。現在ツカサは不在であるが、本来は両御嶽ともに神職を継承する家系が存在し、その任期も終身であった【注5】。運城御嶽のツカサは代々土原豊見親の側室とその子に由来する里神、「名人太郎」を祀る神里ヤーの家系から輩出されるならい

であった（第2節参照）。

③多良間神社は明治35年（1902）創建の比較的新しい拝所で、土原豊見親を祀る。その氏子も、シュンヌウジと呼ばれる土原豊見親の子孫を中心とするものである。二才頭・ツカサが存在し、拝所としての機能や位置付けは御嶽とほぼ同格である。現在不在のツカサ職は、土原氏系統の家の嫁継ぎが原則であった（中山・富村・宮城 1990：120頁）。創立以来、トモヅカサは居ない。

④塩川御嶽は、『由来記』『旧記』『遺老説伝』ではガワラ瀬御嶽の名称で記載がある御嶽である。仲筋字の御嶽（多良間神社も含む）がすべて土原豊見親由来の拝所であるのとは対照的に、塩川字の③御嶽は、どれも土原豊見親以外の人物を由来とする。塩川御嶽の場合は塩川村のハリマタマサラである（由来は前章参照）。この塩川御嶽も、①運城御嶽や②泊御嶽と同様に、乾隆18年に社殿を建造し整備された。多良間では運城・泊・塩川の3御嶽を長女・次女・三女とする伝承もあり、『由来記』をはじめとする公的史料の中でも、この3御嶽の名称は一組で記載されている。

⑤普天間御嶽は集落から離れた島の東南端に位置する御嶽である。かつて塩川与人赴任の為に多良間に渡航する途中で落命した「荷川取与人」という人物の遺体が漂着したことに由来する。普天間とは荷川取与人の信仰する宜野湾の普天間権現に因んだ名称である（『多良間村史』6-227・228頁）。多良間6御嶽の内、唯一の外来者由来の御嶽である。荷川取与人に関する詳細は不明である。この⑤普天間御嶽と、⑥の嶺間御嶽は前章の王府の公的史料に記載のない御嶽である。二才頭・ツカサ・トモヅカサが居る。

⑥嶺間御嶽は塩川字嶺間に所在し、御嶽と同名の嶺間按司を祀る拝所である。嶺間按司は土原豊見親以前の時代の人で、中国に漂流し、そこで目撃した神名遊びを帰島後、多良間の人々に伝えた人物とされる。このエピソードは『遺老説伝』等に記載されている。現在この神名遊びに関する習俗は多良間には残っていない。

## (2) 御嶽の氏子

多良間の御嶽（以下、多良間神社も御嶽の名称で呼ぶ）は基本的には歴史上の特定個人、また神の出現に何らかの形で関与した個人と神を祀るものである。前者の型が多良間神社（土原豊見親）や嶺間御嶽（嶺間按司）であり、後者が運城・泊御嶽（土原豊見親）、塩川御嶽（ハリマタマサラ）、普天間御嶽（荷川取与人）である。

これら6御嶽の管理運営（清掃や個別行事）は氏子が担当するが、字や村レベルの大きな祭事にはその神職のツカサと二才頭を通して関与する。旧5月または6月のみずのえ・

たつ、みずのと・みの日に行われるスツウプナカの祭では、各御嶽のツカサと二才頭は運城、泊、塩川、普天間、嶺間、多良間神社の順に着席する【注6】。これは島人の各御嶽に対する順位付けの認識を反映したものとされており、その基準は由来の古い順である。18世紀初頭の『由来記』に記載のある3御嶽が上位に入り、明治後期に創建された多良間神社が一番下に来る（嶺間御嶽の由来の人物の嶺間按司は土原豊見親より古い時代の人であるが、御嶽が整備された時期が遅いためにこのような位置付けになるという）。現在はツカサが不在の御嶽が多く、祭場での祈願は男性神役の二才頭が行うが、本来は最高位の運城御嶽のツカサただ一人が行うものであった。一方、男性神役の二才頭の中心は多良間神社の同役であるといい、定例会やスツウプナカの祭場に赴く前に二才頭達が集合するのもこの多良間神社の二才頭の家である。

多良間の御嶽の氏子は基本的には居住区域によって決められるといい、その内訳を各字4区（仲筋字：土原・天川・津川・宮良、塩川字：嶺間・大道・大木・吉川）の名称で記したものは以下の通りである。

仲筋字	運城御嶽	土原の大部分・宮良の全部・内土原
	泊御嶽	津川の大部分・天川の大部分・内土原
	多良間神社	天川の大部分・津川の一部
塩川字	塩川御嶽	大木の3分の1・大道の大部分
	普天間御嶽	大木の南3分の2・吉川の3分の2
	嶺間御嶽	大道の一部・嶺間全部

（渡久山：1995）【注7】

旧来の“里”の単位に相当する区は、現在は両字とも4区から成るが、1986年の調査記録に「仲筋の集落は（中略）大小十一の里が集まったいわゆる不井然型集落」「塩川はかなり整然とした屋敷区画をもつ四つの大きい里で構成されている」という記述があり（『沖縄民俗』1986-1頁）、その後特に仲筋字において統合が進んだ結果であるといえる【注8】。

1箇所の拝所に複数の里の混在が見られるが、これは字を地理的に道で3区分した区画の内訳であるという。本来は島レベル・村レベルの拝所である御嶽の氏子が里の単位を超越するのは不思議なことではないが、現行のように各字を地理的に3区分する形式が始まったのがいつ頃からであるのかは不明である。現在この3区分された1区画を指す単位がないこと、古くとも3区分の形式が始まったのは多良間神社が創建された明治後期であることなどから、これらは比較的新しいものである可能性もあるといえる。

現在では、各御嶽の氏子はさらに近隣の10名ほどの集まりから成る“組”という単位に分割され、年間を通して特定の組が御嶽の管理運営を担当する持ち回り式になっている。嶺間での聞き取りによれば、嶺間御嶽の氏子は3組に分かれ、一年間御嶽の当番をする組を“ブシャ”と呼ぶ。ブシャの長になる人の家を“座”と呼ぶ。スツウプナカや八月踊り

の時に機能する“座”という集団が以前は御嶽の祭祀にも存在したと言われるがその名残であろう。本来は上記の2祭祀の座と同様に、各座の担当を表す“イン座（海座）”“ブシヤ座”等の名称が存在したという。このことから分かるように、現在御嶽と氏子の間に新しい関係が生じつつあり、後述する里神がその信仰の範囲を飽くまで里という枠の中で存続させてきたことに対し、本来島レベルの祭祀の祭場、島全体の拝所としてそのような枠を持たなかった御嶽もまた、現在ではその管理運営の主体が新しい地理的な区分の中に縮小され、小規模化が進みつつあると言える。

## 第2節 里神

『多良間村史』に記載された御嶽以外の拝所は、旧集落の“里”の単位で点在する里神をはじめ、井戸の神、海や山の自然神など、その数は仲筋字30箇所、塩川字20箇所にのぼる。

里神は、主にその成立の由来に深い関わりを持つ家や、所在する地域の近隣住民を中心とした小規模な氏子集団を持ち、毎月朔日、十五日の拝みや年間の行事を個別に営む。井戸の神は、里神と同様に旧来の集落単位に由来する神であり、特に豊年祭のスツウプナカと関わりが深い。スツウプナカでは2字が4集団に分かれて祭祀を行い、ツカサや二才頭が各集団を巡拝する形式をとるが、祭祀の期間中、各集団はそれぞれの旧集落の井戸に赴き、供物を捧げニリを謡う。海や山の神は、特にその場所に大きな意味を持つ拝所であり、特定の家が祭事を営む例（海ウプナカ等）もあるが、草を刈ること薪を取ることの禁止等、一般的な制約を持つ場所という性格も持つ。

これらの拝所の神を大きく二つに分けると、生前の逸話や人格を持つ実在の人物由来の神と、場所や機能に由来する超人格的な神がある。前者は歴史上の人物に因んだものや、あるいは人格を持つ神を祀る里神であり、後者の代表は井戸の神、海山の神、太陽の神などの自然神を祀る拝所である。本節では特に、多良間の歴史的背景や特質を反映する前者の範疇の人物由来神を祀る拝所に着目し、論を進めたい。人物由来の神としては、歴史上の支配者・有力者、何らかの功績を立てた役人、市井の人々など様々なものがある。ここでは最初にそれらの里神の性格を字ごとに概観し、次に多良間史上最も有名な人物である土原豊見親とその一族に由来する拝所を特にとり上げて見ていきたい。

多良間にある人物由来の神を祀る拝所には以下の所がある。これは、多良間史上の人物や、特定の個人と関わりの深い神を祀るものである（ ）内がその人物である。

塩川字 フタツジウガン（真保那璃）

マブナリヌコール（真保那璃）

ユスカ・ウガン（ヤマガラ豊見親）

寺山ウガン (心海上人・土原豊見親)  
ナガヤマヌコール (ヤマガラ豊見親)  
スバネートヌパカ (ネートウブズカマ)  
ナーラディ (波利真大殿)  
ウブキヌカム (ミダルツクドゥン)  
ピトマタウガン (土原豊見親)  
ナカグムリウガン (土原豊見親)

仲筋字 シャーダ・ゴール (ヤマガラ豊見親)  
ウペーツトウブズ (ウペーツトウブズ)  
カンナマル・クールク (カンナマル・クールク)  
ナガシャキ ヌカン (羽地村文子)  
ウイダペーウガン (ウペーガラユヌス)  
ニスタカンニ (タルマツトゥブリ)  
ブナジェーウガン (ブナジェー兄妹)  
ウブドゥマリヌカン (天川区松原家の娘)  
ヤマトウウガン (マンツケ)  
トゥカパナヌカン  
パタキズノ神 (ウプヤーヌ・ウブシュウ)  
名人太郎 (土原豊見親)  
ウツバルウガン (土原豊見親)  
ナカスズヌカン (土原豊見親)  
パイヌッジヌ・コール (土原豊見親)  
アラダトゥヌ・コール (土原豊見親)  
土原ウガン (土原豊見親)

#### (1) 人物由来の神—外来者—

外来者由来の拝所としては、上で普天間御嶽 (荷川取与人) の名が挙げたが、その他に宮古の仲宗根豊見親の嫡子仲屋金盛豊見親のひとり娘真保那璃を祀るフタツジウガン、マブナリヌコール、羽地村文子を祀るナガシャキ ヌカン、波上山護国寺の第24代目住持の心海上人を祀る寺山ウガンなどがある。

真保那璃に関する伝承は『由来記』『宮古島旧記』『宮古島記事』等に記されている。彼女は首里から宮古へ帰島する際、暴風雨に遭遇し、多良間の普天間港に漂着しそこで死亡した。真保那璃の遺体を発見し、この地に埋葬したのは多良間島民のウペーツトウブズと

いう人物であり、彼を祀る同名の拝所が仲筋字にある。真保那璃を埋葬したといわれる場所は塩川字に2箇所あり、そのうちの一つのマブナリヌコールを敷地内に持つ源河家が同所の祭事を司り、集落外に位置するフタツジウガンの方は、近隣の住民が供物を捧げている。

仲筋字ナガシャキ ヌカンの羽地村文子は、長瀬井戸（ナガシガー）の掘削工事に功労があった役人で、島外より多良間に赴任し客死した。ナガシャキ ヌカンは羽地村文子はその功労をたたえられ島民により葬られた場所である。戦後まで海ウブナカの祭事をする集団があったという。

寺山ウガンは波上山護国寺の第24代目住持となった心海上人が多良間島に居住していた場所であると言われている。上人は土原氏宗家の運天家8代目の春倫の父であるという伝承が土原宗家の運天家に伝わっており、このような由来から、祭事は運天家（ナカグマリ）を中心とする数軒が司る。

## (2) 人物由来の神—塩川字—

多良間の旧部落の支配者・有力者を意味する称号は、古い順から“若神”→“按司”→“大殿”→“豊見親”と推移する（『村誌 たらま島』65頁）。塩川字の多良間島の人物に由来する拝所は、旧部落の有力者や人望のある人物を祀ったものが主で、“大殿”の時代の波利真大殿に由来する拝所が2箇所、次の“豊見親”の時代のヤマガラ豊見親に由来する拝所が2箇所ある。

波利真大殿は旧塩川村の支配者であり、一説には塩川御嶽の由来の話で二つの大石が飛来するのを目撃したハリマタマサラと同一人物であるとされる。彼自身に由来する拝所としてナーラディが、彼の重臣ネートウブズカマが諍いで命を落としたのに由来するスバネートヌパカがある。ナーラディは塩川御嶽の配下のような存在であるといわれ【注9】、近くには波利真大殿の屋敷跡とされる場所がある。

ヤマガラ豊見親を祀った拝所はユスカ・ウガン、ナガヤマヌコールと、豊見親の出生した屋敷跡シャダ・ゴール（仲筋字）の計3箇所である。ヤマガラ豊見親は士族出の遠見番役であったと言われ、学問に秀でた人望が厚かったことから人の妬みを買って、謀殺されたという伝承が残っている。里の名を冠したユスカ（吉川）・ウガンは吉川区の里神であり、祭祀は里民が担当する。ヤマガラ豊見親はまた航海安全、五穀豊穰、疫病予防、大漁祈願の神でもある。

残るウブキヌカミは、ユスカ・ウガンと同様に里名を冠した拝所であるが（ウブキ＝大木）里神ではなく、旧大木里のミダルツクドゥンという人物が、巨大な漂流木から一軒家を新築した逸話に因むものであるという。ツクドゥンの家の屋号は「ウブキヤー」であるというが里名との関わりは不明である。

### (3) 人物由来の神—仲筋字—

ここで挙げる仲筋字の多良間島の人物由来の拝所の多くは、塩川字と対照的に市井の人物を祀るものが多い。旧部落の支配者・有力者を祀る拝所は、仲筋字の場合、土原豊見親とその家系に集中しており（(4)参照）、例外としてはわずかにトゥカパナヌカンがあるのみである。同拝所は昔トゥカパナ里にいた智恵の優れた女性を祀ったもので、彼女は多良間ヤカラという悪党一行を退治し、後年里のリーダー格の役割を担ったという。この女性の名は明らかにされていないが、後世にはトゥクガパナウエーガンと称され、以来豊作の神として祀られている。

市井の人々を祀る拝所には様々なものがあるが、その人物達は特に里や多良間島に貢献した人物や役人などではなく、珍しい逸話や伝承の主人公達である。美人の誉れが高く、天にさらわれたカンナマル・クールク（カンナマル・クールク）、雨乞いのニリを伝授され、死後雨乞いの神になったウペーガラユヌス（ウイダペーウガン）、女神と婚姻したやもめのタルマツトウブリ（ニスタンカニ）などがそれである。その一つ、ブナジェーウガンは口碑によれば以下のような話である。昔、ブナジェーという兄妹があった。二人が畑に耕作に出ていたところ大浪が寄せて、二人はウイネーツツという丘に駆け上り木にしがみついて難を逃れた。島人達は大浪にのまれ、助かったのはブナジェー兄妹だけであった。二人は夫婦となるが最初に生まれたのはへびととかけ、次にしゃこ貝、その次に芋麻糸が生まれ、最後に人間が生まれたという。二人を島建ての神とする神話である。この話の内容は、前章の運城・泊御嶽由来の伊知ノアジ・ホナママ夫婦の大浪遭遇の話と同型のものであるが、これについては次章で述べたい。

### (4) 人物由来の神—土原豊見親とその家系—

土原豊見親伝説に関連した里神は両字に合計9箇所ある。これに豊見親の墓所ウブメーカと運城御嶽、泊御嶽、多良間神社を加えた13箇所が多良間の土原豊見親由来の拝所である。現行の大きな祭祀の時はこうした土原豊見親関連の拝所に供物が捧げられ、土原豊見親の伝承を語るニリが謡われる。彼の多良間史上への出現が島の信仰や祭祀に及ぼした影響は大きく、それは現代にも引き継がれている。御嶽以外の拝所には、①土原豊見親自身を祀るものと②彼に関わる人物を祀るもの、そして③彼以後の土原一門の人物（あるいはその人物に関与した者）を祀るものがある。

①土原豊見親自身を祀るものには、彼の出生の地とされる土原ウガンがある。ここは八月踊りの時の仲筋字の公演祭場である。土原ウガンには2箇所に祠があり、構内の祠の3基の香炉はそれぞれ天の神、土原豊見親、土原豊見親の祖父を祀り、北側の離れにある祠の香炉は、土原豊見親の両親平屋西を祀るという。ここでいう土原豊見親の祖父が『由来

記』『旧記』の土原大殿を指すものかどうかは不明だが、両親の姓を平屋西とする北側の祠の存在は、『球陽』にある平屋西-折曾蘆父子のヲソロ伝承に沿った内容である。

②の土原豊見親に関わる人物を祀る拝所は、一つには土原豊見親の側室の屋敷跡と、もう一つには宮古の金志川金盛とオーガマを巡るものがあり、何れも土原豊見親自身は深く関与していない。

側室の屋敷跡と言われる場所は両字に1箇所ずつある。仲筋字のものは名人太郎といい、これは土原豊見親と側室の間に生まれた男児に因んだ名である。伝承ではこの男児の娘がツカサになったということであるが、実際、名人太郎を祀るカンダトゥヤー（神里ヤー。シンドゥーヤとも）の家は、伝統的に島内神職の最高位である運城御嶽のツカサを輩出する家系であった。一方、塩川字の側室の屋敷跡といわれるヒトマタウガンは、現在八月踊りの塩川字の公演祭場であり、塩川御嶽の氏子達が同所の氏子を兼ねている。

宮古の金志川金盛とオーガマ・クイガマ姉妹を祀る拝所は、仲筋字のウツバルウガン、パイヌッジヌ・コール、アラダトゥヌ・コールの3箇所である。ここに祀られる3名は、何れも1522年に仲宗根玄雅豊見親が与那国島の鬼虎征討を行った時の事件に関わりを持った人物であると伝えられるが、異説も多く内容は統一されていない【注10】。土原豊見親はウツバルウガンの由来の話の中で、自身の屋敷で金志川金盛（キンスガー）を謀殺したといわれる。その死後の恨みを畏れた土原豊見親は金志川を丁重に屋敷の東側に葬り、以後は航海安全の神として祀ったという。外来者が神として祀られる例は(1)の真保那璃など他にも見られるが、金志川金盛（キンスガー）は土原豊見親伝説と関連し、その足跡を多良間に残すことになった例であるといえる。

③の土原豊見親本人ではなくその子孫や家系に由来する拝所としては、塩川字のナカグムリウガン、仲筋字のナカズヌカンがある。前者のナカグムリウガンには土原宗家の運天家の氏神を祀る香炉があり、古くは塩川字の八月踊りの祭場であったと言われる。主な祭祀者も運天家の人々である。

ナカズヌカンは土原豊見親春源から5代目の春暦に由来する拝所で、春暦は航海術に長けた政治家であったが、ある時中国へ行く途中、船が難破したのをその航海術で無事に帰還させた逸話から、春暦の死後にその時の船員の子孫達が供物を捧げて拝んだのが始まりであるという。また(1)の外来者由来の拝所で、心海上人に由来する塩川字の寺山ウガンの名を挙げたが、運天家（ナカグムリ）には同家8代目の春倫の父を心海上人とする話が伝わっている（『多良間村史』6-237頁）。

### 第3節 拝所に見る多良間島の信仰と土原豊見親



第1章で王府の公的史料に登場する4つの御嶽（運城・泊・ガワラ瀬・城花持）を見たが、この4御嶽は王府から見た当時の多良間・水納島を構成する各村の代表的な聖地を挙げたものに過ぎず、現実には多良間の信仰や拝所は種類も機能も多様化しており、この4御嶽のみが特に重要な場所であったというわけではない。

『由来記』『旧記』の記述は当時の王府の視点を代表するもので、王府が多良間史上の人物で仲宗根豊見親を通じて首里王府の体制側につき、八重山のオヤケアカハチ平定に協力した土原豊見親をその人物と業績（多良間島統一）から評価し、その伝承を記述の中心となる部分に採択している。『由来記』『旧記』の中で王府の評価の帰結するところとは、土原豊見親の曾祖父伊知ノアジより始まる彼の家系、すなわち土原豊見親から世代を遡ったその血筋の正統性であり、運城・泊御嶽由来の中で伊知ノアジ系統の人間と神の加護や権力との接近が示されている。

無論、多良間史上における土原豊見親の位置付けの重要性は、多良間島という地域からの視点においても同様であり、それは数多く存在する土原豊見親由来の拝所や、村レベルの大きな祭祀で土原豊見親のニリが謡われること、運城御嶽のツカサが島のツカサ職の最高位に相当すること、同様に多良間神社の二才頭が島の二才頭職の中でリーダー的な役割を担うことなど、様々なレベルや形態で影響力の強さが反映されている。しかし、これら多良間島の側から捉えた土原豊見親の評価や価値は王府のものとは若干異なっている。例えば運城御嶽のツカサの位については、一般の島民はそれを御嶽の成立年代の古さに由来すると認識しているものであるし、また第2節の土原豊見親由来の拝所のところで見たとように、地域レベルの拝所においては特に土原豊見親以前の家系の血筋を美化する傾向はなく、豊見親の祖父と父平屋西を土原豊見親とともに祀る仲筋字の土原ウガン（伊知ノアジの名はここには現れない）を除けば、むしろ彼以後の後代の土原豊見親の家系や血筋にちなむ拝所の方が多い。前節(4)の③に挙げた拝所がそれであるが、②の土原豊見親の側室の屋敷跡といわれる二つの拝所（名人太郎・ヒトマタウガン）も、一方は運城御嶽のツカサを輩出する家系となり、もう一方は現在の八月踊りの塩川字の祭場になるなど、後代への影響力の大きさが現行習俗の中で確実に現れる例もある。土原豊見親由来の拝所の特徴は特にその数の多さにあるが、同一人に由来する拝所が島内の複数箇所に点在するのは別段珍しいことではなく、土原豊見親系統のものはただその規模において他の人物由来の拝所と異なるのみである。

このように、多良間の外部（王府）からと内部からでは土原豊見親を評価する基準が若干異なっており、多良間島においては土原豊見親は数ある人物（権力者・有力者）に由来する拝所の中でも代表的なものを見なしているのに対し、王府は豊見親をそれまでの多良間の有力者や権力者とは一線を画す存在であるとする神話化の作業を積極的に進めている。こうした認識の差はいかなる理由から生じたものであるのか。次の最終章では、『由来記』『旧記』が採択した土原豊見親に関する伝承が、王府のいかなる目的・方針を反映したものであるかという問題について、これらの主題に関する考察を行いたい。

## 終章・まとめ

前章第3節の考察では、公的史料に見る多良間・土原豊見親観と、多良間島の現行習俗に見る土原豊見親観に若干、異なる傾向が見られることを述べた。しかし、第1章の分析からも明らかなように、公的史料においても土原豊見親伝承は完全に統一されているわけではない。

史書に収録されたヲソロ伝承には大きく分けて二つの種類がある。一つは伊知ノアジの系譜の4代目に当たるヲソロ（『遺老説伝』では「遠曾呂」）、いま一つは平屋西の子ヲソロ（同「折曾蘆」）を主人公とするものである。前者の伊知ノアジの系譜の3代目（土原大殿の子、ヲソロの父）は空白であり、多良間の現行習俗ではこれに平屋西を充てて4代の系譜を完成させているが、史書の記述においてはこの二つのヲソロ伝承が符合する例はない。二つのヲソロ伝承を収録する『遺老説伝』でもそれぞれ項目を設けてこれを別個に紹介し、ヲソロの表記を「遠曾呂」「折曾蘆」の2通りに分け、敢えて混同を生じさせないような手法を取っている（以下では『遺老説伝』の例にならい、伊知ノアジの系譜のヲソロを「遠曾呂」、平屋西の子ヲソロを「折曾蘆」と表記し、区別する）。

この二人のヲソロの内、「遠曾呂」伝承の一方のみを採択し、非常に洗練された形で完成させたのが『由来記』『旧記』の記述である。

二人のヲソロが完全に同一人物を指すものであるか、また同一人物であるならば、なぜ史書中に伊知ノアジの4代の系譜を完成させた記述がないのか、などという問題についてはここではこれ以上言及はしないが、本章では『由来記』『旧記』の「遠曾呂」伝承における完成度の高さや記述の洗練度という問題に注目し、同記述を構成する諸要素について以下で考察を行い、公的史料に見る王府の多良間・土原豊見親観に関する一仮説を提示したい。

### 第1節 水納島と土原豊見親

#### (1) ヲソロと水納ペーユヌス

『由来記』『旧記』の「遠曾呂」伝承を構成する主要な要素の一つには、水納島の存在がある。

多良間の現行習俗では、一般に水納島の水納御嶽は、土原豊見親の叔父（あるいは守兄）である水納ペーユヌスを祀る拝所であるという認識がある。水納ペーユヌスとは土原豊見親時代に水納島を統治した人物であり（『多良間村史』4-176頁）、多良間の民話や口碑伝

承には、この水納ペーユヌスと土原豊見親の関わりを述べた逸話が多く残っている。その代表的なものが以下の話である。

昔、仲筋村と塩川村に争いがあり、仲筋村は劣勢であった。仲筋村の支配者である土原折曾呂（春源）は、水納ペーユヌスに加勢を頼むために水納島にわたり、そこで霊刀と策を受けられる。この霊刀の威力によって、仲筋村は塩川村に勝利した（『多良間村史』6-227頁）。

伝承によって、細部に多少の差異はあるが【注 11】、どの話にも共通するのは、若き土原豊見親が水納ペーユヌスの助言と力を借り、劣勢の状況から勝利を得るに至るというエピソードである。ここでは水納ペーユヌスは、土原豊見親に援助を提供する、身内である目上の人間として描かれている。

ここで想起されるのが、『由来記』『旧記』の「遠曾呂」伝承中の、伊知ノアジの次女と「水納島主、ヨノヌシ」との婚姻のエピソードである。この伝承の中では、水納ペーユヌスと土原豊見親のように、ヲソロと「水納島主、ヨノヌシ」の間の直接の関わりを示すエピソードはないが、伊知ノアジの次女（ヲソロの大オバ）を介して、両者が身内の関係にあり、「水納島主、ヨノヌシ」が目上の有力者であったことを考えると、二つの伝承における両者（水納ペーユヌス、「水納島主、ヨノヌシ」）の立場は非常に類似したものであるといえる（この義理の大オジの存在が、伊知ノアジ系統の人間と権力との接近を示す布石のエピソードとなっていることについては、第1章で述べた）。

このように、「遠曾呂」伝承あるいは現行習俗の口碑においては、ともに水納島や水納御嶽は土原豊見親との関わりの中で言及されている。しかし、以下に見る『雍正旧記』の水納御嶽由来は、これとは全く異なるタイプのものである。

## （2）『雍正旧記』にみる水納御嶽由来

『雍正旧記』は、康熙44年（1705）の『御嶽由来記』に始まる宮古の史書編纂事業の一環として、『由来記』から14年後の雍正5年（1727）に編纂されたものである【注 12】。この中の「水納村」の項で、同島の御嶽由来に関する記事が見られる。

### 一、同御嶽神豊見やお不そけと唱

右由来ハ昔神代に城たけと申所に天神五穀御持下候をくし原よのし水納へ屋よのしと申もの式人にて拝候て此所御嶽に仕成祭來為申由にて中古迄祭申候事（『平良市史』3-53頁）

これによると水納御嶽【注 13】の由来は、天神が五穀を下した場所（城たけ）を、「く

し原よのし」「水納へ屋よのし」という両名が祀ったことが始まりである。この話で重要なのは、土原豊見親との関連が一切言及されていないことである(『雍正旧記』そのものには、いわゆる「折曾蘆」型のヲソロ伝承が収録されている)。現行習俗では水納御嶽の祭神として一般に認識されている水納ペーユヌスだが、土原豊見親系統の人物と全く関係のないこのような御嶽由来があるのは非常に興味深いことである。

ここで『由来記』の運城・泊御嶽由来(「遠曾呂」型伝承)、『雍正旧記』のヲソロ伝承(「折曾蘆」型伝承)、現行習俗の口碑(独自の土原豊見親伝承)の内容をそれぞれ比較した時に、ある一つの傾向があることに気付く。それは、逆賊の平定や村落間の抗争など、武力行使を行うヲソロの背後には水納島勢力の暗黙の内の了解や加勢の意志が存在するということである。それは「遠曾呂」型伝承でいえば身内の水納島の有力者、口碑の土原豊見親伝承でいえば水納ペーユヌスの存在に象徴される通りである。「折曾蘆」型伝承はヲソロ個人の信仰心の結果として運城・泊御嶽に神が降臨する話で、その後のヲソロの多良間統一事業を暗示させる武力行使のエピソードは書かれていない。この話を採択した『雍正旧記』の水納御嶽由来がヲソロと全く関連のない内容であることは、こうした脈絡からは自然なこととして理解出来る。

水納島がヲソロの武力行使を支持するこのようなエピソードは、土原豊見親の多良間統一事業の際に、水納島が武力制圧の対象からは除外されていたかも知れないが、何らかの形で実質的には土原豊見親の支配下に属していたことの可能性を示唆するものと考えられる。ここでいう武力以外の支配とは、現在水納ペーユヌスが水納御嶽の祭神として認識されていることから窺えるように、おそらくは宗教的なものであったと推察出来る。

注意すべくは、この水納御嶽由来と「折曾蘆」型伝承を収録した『雍正旧記』が宮古側の史書であることである。『由来記』をはじめ、筆者が第1章で挙げた史料はすべて王府編纂の公的史料である。そして、王府の最大の関心事とは、『球陽』の「一 土原豊見親、多良間主となる(1500年)」という記述が王府と多良間の関わりを示した最初のものであったことから分かるように、遠隔の離島にありながら王府に従属する統治者の出現というまさにその事実にある。この意味では、王府が土原豊見親をそれまでの多良間史上の統治者とは全く異なる人物と認識し、その伝承の採択にあたり神話化の作業を行った可能性も否めないのである。血統の正統性を統治者の資格条件とする発想は『中山世鑑』以来の王府の史書編纂事業において中心的な思考であり(藤江:1996)、『由来記』の「遠曾呂」型伝承はまさにその形式に則ったものといえる。

一方、宮古側の多良間島の認識は、それとはまた異なるものである。土原豊見親が宮古の仲宗根豊見親の八重山遠征に従軍した史実からも窺えるように、宮古における多良間や土原豊見親の評価は、宮古本島や仲宗根豊見親に比して概して低く、それゆえに宮古編纂の史料において土原豊見親伝承の神話化の作業が行われた可能性は考え難いのである。『雍正旧記』記載の「折曾蘆」型伝承がヲソロ伝承の原型に近い形であり、『由来記』の「遠

曾呂」型伝承がそれを土台とした創作であるというのはあくまで仮説に過ぎないが、次節に見る伊知ノアジの考察等からも分かるように、『由来記』の運城・泊御嶽由来そのものは全体を通じ非常に洗練された整合性のある内容であるといえる。そして、この記述を構成する各エピソードに類似する複数の話が単独で存在することには、錯誤や混同を越えて何らかの意味があると考えことは決して不自然ではないと思われるのである。

## 第2節 伊知ノアジ伝承に関する考察

乾隆17年(1752)編の『宮古島記事』には、「一、多良間嶋立始由来の事」として、以下のような話が収録されている。

### 一、多良間嶋立始由来の事

右上上古兄伊地之按司妹不なさかやと申候テ兩人罷居候一日該兩人仲筋村長底原と申所へ罷出島仕事仕候砌南海より大濤を起四海波揚候を見付驚入則ち高嶺と申所へ這登我等兄妹之一命御助被下かしと手を合掌にて頻に天に祈誓し其尽朱十方臥居候処嶋中人家不残一同に被引流候右兄妹兩人不思議ニ助命致夢の覚たる心地にて起立謹て天に拝し忝も我等此嶋に残居候儀天の恵を垂給ふ故かと難有奉存最早此嶋に他人なき上ハとて兄妹夫婦の縁を詰ひ子孫致繁栄嶋立為申由古伝有之候事

附 伊地之按司末葉土原之豊見親と唱へ成化年間之頃宮古嶋仲宗根豊見親ニ相附為申由候忠節之儀 は旧記ニ相見得申候 (『平良市史』3-61頁)

一読して分かるように、本論文ではこの始祖神話に類する二つの話を既に紹介している。一つは『由来記』の運城・泊御嶽由来の冒頭のエピソード(伊知ノアジ夫婦の大浪遭遇譚)、いま一つは第2章の人物由来神の拝所の(3)で挙げた仲筋字のブナジェーウガンの拝所由来である。三つの話の要点を整理すると以下ようになる。

#### (1) 運城・泊御嶽由来 (『由来記』『旧記』)

- ①伊知ノアジと妻ホナママ、嶺間に耕作に出かけ、大浪に遭遇。
- ②夫婦、生き残る。
- ③夫婦に三人の子(土原大殿と二人の娘)生まれる。
- ④土原大殿の孫、ヲソロ誕生。
- ⑤ヲソロ、塩川村の逆賊ハリマニキモヤを平定。

#### (2) 多良間嶋立始由来 (『宮古島紀事』)

- ①伊地之按司・不なさかや兄妹、長底原に耕作に出かけ、大浪に遭遇。

- ②兄妹、生き残る。
- ③兄妹に子生まれる。
- ④伊地之按司の末葉に土原豊見親生まれる。

(3) ブナジェーウガン由来 (口碑)

- ①ブナジェー兄妹、耕作に出かけ、大浪に遭遇。
- ②兄妹、生き残る。
- ③兄妹に子生まれる (へび、とかげ、しゃこ貝、芋麻糸、最後に人間)。

(1)～(3)は、物語の展開においては一見非常な類似を見せるが、内容の細部や主題を詳細に検討した時、意外にも齟齬が多いことに気付く。例を挙げれば、ここに登場する主人公二人が、(1)では夫婦であるが、(2)(3)では兄妹であること、その主人公が(1)(2)では土原豊見親の先祖であり、(3)では多良間島の人類の始祖であること、また各話に神の介在が暗示されているが、それが(1)では特定の血統を守護する御嶽の神、(3)では自然の摂理に近い存在であること、などがある。

また、各話を構成するエピソードの数とその役割にも注目したい。

三つの内で最もエピソードの数が少ない(3) (①②③) は、多良間の島立てと人類創成を主題としている。この話は、三話の中では唯一土原豊見親との関連が言及されないものである。

(2)では、(3)と共有する①から③のエピソードに④の記述を付加し、兄妹の末裔に多良間史上の英雄土原豊見親が存在したことに言及している。しかしここでは伊地乃按司兄妹相姦の禁忌破りの結果を問う記述はなく、結果的に兄妹の行為は文中で黙認された形になっている。これでは④の記述の存在する意味は不明であり、エピソードの未消化という点で、(2)は他の二話に比べ主題不在の状態を呈している。

最もエピソードの数が多い(1)は、他の二話と共有する①②③のエピソードが、④で出生した土原豊見親の⑤行為・結果を正当化する前段階として位置付けられている。この話の主題は伊知ノアジの系譜の正統性であり、(3)では重要な要素の一つであった兄妹相姦の禁忌破りや人類創成に至る過程は、ここでは一連の記述を構成する要素にすらなっていない。

比嘉政夫は、運城・泊御嶽由来を述べた多良間の伝承を紹介する際、『由来記』の運城・泊御嶽由来とブナジェーウガンの拝所由来の内容の非常な類似から、両者の間に「混同があるものと思われる」(比嘉 1987: 526 頁)として、前者を運城・泊御嶽由来の紹介から除外しているが【注 14】、『宮古島記事』の記述も含めた三つの話を比較分析した結果を見る限り、比嘉のいうような「混同」を生じているのはむしろ『宮古島記事』であり、『由来記』とブナジェーウガンの拝所由来の類似・相違は、これに比べ、明らかに意味のあるものといえる。第一に、二つの話が共有する①②③部分であるが、ブナジェーウガンの拝所由来がこの三つのエピソードのみで一話完結するのに対し、『由来記』ではその部分が全体

の話構成するエピソードの一つに変化していること、第二に、その変化の過程で、ブナジェーウガンの拝所由来の主題であった要素が消失し、『由来記』の運城・泊御嶽由来の主題に影響を及ぼしていないこと、などがその理由として挙げられる。そして、どちらの伝承からどちらが派生するかという問題を考えれば、答えは明らかにブナジェーウガンの拝所由来から『由来記』運城・泊御嶽由来へ、である。

第1節では、『雍正旧記』の水納御嶽由来の示唆から、『由来記』の「遠曾呂」型伝承が「折曾蘆」型伝承を基礎に成立した可能性に関する考察を述べたが、それは伝承の後半部分（エピソード④⑤）においてであり、本節の検証結果からいえば、伝承の後半部分（エピソード①②③）に関しては、同様のことがブナジェーウガンの拝所由来を土台になされてことが推察出来る。既に述べた通り、こうした『由来記』の伝承収録と成立過程に関する考察はあくまで仮説に過ぎず、今後の歴史民俗研究における検証や批判を待つものである。

## まとめ

本論文では、史料に見る多良間関連の記事から、特に土原豊見親伝承を扱ったものに焦点を当て、異聞・異伝の多い各伝承を史料ごとに分析し、その傾向や主題に関する考察を行った。

500年という時代の変遷を経て、今なお多良間の現行習俗に大きな影響力を保持する土原豊見親であるが、その背景には、当時の王府の宗教政策に呼応した土原豊見親による多良間（水納）の宗教的基盤の整備があったことは、ほぼ疑いのないことであろう。中でも御嶽の整備は、多良間統一と並ぶ土原豊見親の多良間史上におけるもう一つの大きな成果であるといえる。『由来記』の運城・泊御嶽由来に代表されるヲソロ＝土原豊見親伝承は、ヲソロに対する御嶽の神の加護とそれに値する彼の血統の正統性を述べた内容であり、後の土原豊見親の業績を正当化し、神話化する上で重要な役割を果たすものであった。

多良間の現行習俗における土原豊見親の位置付けで特筆すべきこととして、現代の神話化という現象が挙げられる。これは、史料では運城・泊御嶽由来との関わりの中で言及されるのが常であった土原豊見親伝承が、現代では明治期創建の多良間神社をはじめ土原豊見親系の拝所全般の位置付けが向上し、土原豊見親が全島レベルの新しい信仰となりつつあることを意味する。また、土原豊見親の先代の血統を重視する『由来記』の傾向とは対照的に、多良間現地では土原豊見親由来の家筋と御嶽・神事との関わりなどから、彼を起点とする後代の血統をより重視する傾向があることなども挙げられる。従来の民俗学・文化人類学研究では、史料に記載された内容と民間の口碑伝承等の間に生じる差異を自明のものとし、敢えて現行習俗の人々の考え方に比重を置く傾向が見られたが（比嘉：1987：529・530頁）、史書記述もまた現行習俗における人々の思考や価値観を決定する要

素の一つ（伝統の解釈等）となり得ることは事実である。本論文の作業仮説で試みたような、伝承を含む史料の歴史的研究的分析は、現代姻族の人々の考え方の源を再検討する上で有効な手法であると同時に、今後一層必要な重要課題の一つであると思われる。

【注】

【注1】『由来記』巻2-78・79頁、巻20-587～589頁。

【注2】『旧記』巻之9-156・157頁、附巻之3-226頁、附巻之10-266頁、276頁。

【注3】『球陽』外巻1-40・40、106・107頁、外巻2-55、136・137頁、外巻附-70、168頁。

【注4】垣花良香によると、二才頭には士族の有徳の男子が、ツカサには士族の女子が、トモツカサには平民を選ぶとされる。トモツカサの居る御嶽は、運城御嶽、塩川御嶽、普天間御嶽の3箇所である。

【注5】『のろ調査資料』に記載された、各御嶽の神職を輩出する家系は以下の通りである。

多良間神社 仲松家（アカミソヤー）

運城御嶽 安里家（神里ヤー）

泊御嶽 儀間家（ユマタダー）（中山・富村・宮城：1990-120頁）

【注6】『多良間村史』では、運城・泊・塩川・多良間・普天間・嶺間の順とされる（『村史2-133頁』）。

【注7】『のろ調査資料』では以下のような里の区分で書かれている。

多良間神社 宮良・土原里

運城お嶽 天川・津川里

泊お嶽 天川・津川里

嶺間の嶽 嶺間里

塩川お嶽 大道里

普天間お嶽 大木・吉川里（引用、【注5】と同じ）

【注8】旧里の単位で分けられるスツブナカの祭場区分も、以下のように仲筋字の区分には混在が生じるが、塩川にはそれがない。

仲筋字：第一祭場 ナガシガー（土原・宮良・天川の一部）

第二祭場 フダヤー（天川・津川）

塩川字：第三祭場 ウイヤー（大木・吉川）

第四祭場 アレーキー（大道・嶺間）

【注9】ウガンプトキの時には、塩川御嶽の氏子の中から複数の代表がここで参拝する。

【注10】『多良間村史』6-249、257、258頁参照。

【注11】『村誌たらま島』72頁、中山宮古諸島学術調査研究報告書 188頁。

【注12】宮古の史料については『平良市史』の宮古島旧記類（解題）を参照。

【注13】文中では「同御嶽」とあるが、この前文に「一、水納川洞川年数不相知」という記事があり、ここでは水納御嶽という名称を指すものであると思われる。『雍正旧記』の14年前に編纂された『由来記』に登場する「城花持御嶽」の名はここにはない。

【注14】比嘉は『由来記』とブナジェーウガン由来の伝承の非常な類似から、両者の間に「混同があるものと思われる」（比嘉 1987：526頁）と解し、運城・泊御嶽の



由来のエピソードの紹介から『由来記』のものを除外している。この時比嘉が採  
択したのは『雍正旧記』『遺老説伝』に見る、いわゆる「折曾蘆」伝承の方である。

【参考文献】

- 藤江淑恵：1996「沖縄の宗教構造」『地域と文化』第95号、沖縄：南西印刷出版部（ひるぎ社）
- 比嘉政夫：1987「多良間島 御嶽-神社-その他の聖域・祭場」
- 谷川健一編『日本の神々-神社と聖域』（第13巻 南西諸島）東京：白水社
- 『平良市史』第3巻（資料編1）「前近代」（平良市役所編）、沖縄：1981年。
- 『琉球外巻 遺老説伝』嘉手納宗徳編、東京：角川書店、1978年。
- 垣花良香：1944「多良間島雑記 雨乞い・年中行事・俚諺及び方言の係結び」
- 『南島』第三輯、沖縄：宮古民俗研究会
- 『宮古諸島学術調査研究報告』（地理・民俗編）琉球大学沖縄文化研究所編、
- 沖縄：1966年。
- 中山盛茂・富村真演・宮城栄昌：1990『のろ調査資料〈1960～1966年調査〉』沖縄：ボーダーインク。
- 『シマ』琉球大学民俗学実習調査報告書第1号、
- 琉球大学文学部人間科学学科民俗学研究室編、沖縄：1998年。
- 島尻勝太郎：1976「宮古島旧記について」『沖縄史料編纂所紀要』創刊号、沖縄：沖縄県沖縄資料編纂所
- 『村誌 たらま島・孤島の民俗と歴史・』多良間村誌編纂委員会編、沖縄：1973年。
- 『琉球国旧記』（横山重編『琉球史料叢書』第3巻）東京：鳳文書館、1940年。
- 『琉球国由来記』（横山重編『琉球史料叢書』第1・2巻）東京：鳳文書館、1940年。
- 『多良間村史』第2巻（資料編1）「王国時代の記録」多良間村史編集委員会編、沖縄：1984年。
- 『多良間村史』第4巻（資料編3）「民俗」多良間村史編集委員会編、沖縄：1993年。
- 『多良間村史』第6巻（資料編5）「多良間の系図並に謹書・古文書・御嶽・古謡」
- 多良間村史編集委員会編、沖縄：1995年。
- 渡久山春好：1995『村の歴史散歩』、沖縄：多良間村教育委員会。